



アフリカゾウ獣害への持続可能な対策： 農民・学生協働の養蜂箱

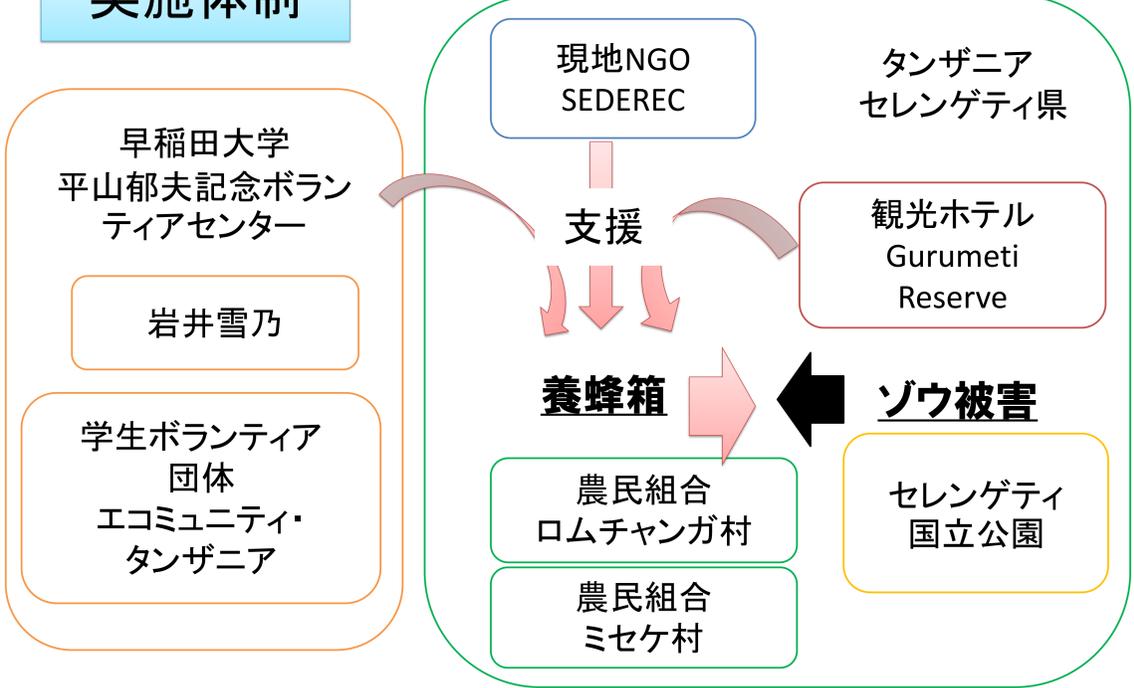
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)
岩井雪乃・公認プロジェクト「エココミュニティ・タンザニア」
Serengeti Development, Research and Environmental
Conservation Centre (SEDEREC)



背景と目的

- アフリカゾウによる農作物被害は、近年、アフリカの広い地域で問題となっている。対策として電気柵や車での追払いが実施されているが、コストが高く、住民による維持管理は難しい。
- そこで本活動では、タンザニアのセレンゲティ国立公園に隣接する村落において、ミツバチによってゾウを追払う養蜂箱フェンスを導入する。ゾウは、ミツバチの羽音が嫌いで、すぐに逃げ出す性質をもつ。
- この対策は、環境負荷が小さく低コストなので、住民主体で維持管理できると期待できる。

実施体制



活動内容

- アフリカゾウによる農作物被害実態調査
- 養蜂箱の調達 設置する畑の選択
- 設置前研修 設置作業
- 設置効果のモニタリング
- 養蜂技術研修
- プロジェクトオープニングセレモニー
- 追払いチーム組織化 懐中電灯配布

- エコタン学生が中心となって、ゾウ被害の実態を調査。被害の大きい畑に優先して養蜂箱を設置。
- 不公平が生まれないように、現地NGOが農民と密な連絡を取る
- 新規設置農民は、経験のある村へ行って研修を受ける。
- 4か所の畑に **養蜂箱177個**設置 (うち**9個**でハチが営巣)
- ゾウの来襲**33回**のうち **31回**は養蜂箱を見て畑に入らず
- ハチの営巣率が高まるように、隣村の養蜂家のもとで研修
- 村人100人・県役人が列席、テレビ・ラジオ・新聞の取材
- 村人が主体的に始めた追払いチームの支援に懐中電灯50個配布



何でも食べるゾウ



設置された養蜂箱



事前研修を一緒にうける学生



農民・学生・現地NGOの協働



隣村の養蜂家のもとで技術研修



懐中電灯は追払いに有効

見えてきた課題と今後の展開

- 養蜂箱を設置しただけではハチは営巣しない
 - ・ハチの好む環境整備
 - ・外敵(ハニーバジジャー、アリ、ネズミなど)に襲われた際のフォローアップ
 →これらの養蜂技術・知識を見につける研修が必要

- 養蜂箱を設置できる畑は限られている
 - より広い面積をカバーできる方法が必要
 - 追払いチームの組織・装備の強化

